

# 「おしどり塚」異聞

宇都宮伝統文化連絡協議会 柏村 祐司

宇都宮市を代表する伝説のひとつに「おしどり塚」の話がある。その伝説の地は、宇都宮市の中心街、大町通りと石町通りに挟まれた所であり、現在「おしどり塚児童公園」となっている。

この公園の北東隅に「鴛鴦塚之碑」（明治二十七年建立）と刻んだおしどり塚の由来を記した石碑がある。碑文によれば「此所の小流を救食川と呼び、其水上を救食沼と云昔此邊に獵師あり在時鴛鴦の雄の首を射りて軀のみを得たり、明朝雌を射止めけるに其羽かひの



おしどり塚児童公園 右端が「鴛鴦塚之略記」碑

下に雄の首を抱けり獵師これを見て發心し此所に埋めてしるしの石塔を建てしと在此物語は無住法師の沙石集に載たり無住は梶原景時の孫宇都宮頼綱の室の甥なれば梶原一族亡びの後當所に来りて在りし故に聞書きせしものなるべし、今此所の人々相はかり其要を摘み石に彫て後の人に告ぐ」とある。

これによるとおしどり塚の話は、無住法師が編さんした沙石集に掲載され、その無住法師は梶原景時の孫で宇都宮頼綱の妻の甥であり、梶原一族が亡びた後、宇都宮氏を頼りて来た折に聞いた話を沙石集に掲載したものであるというわけである。

そこで沙石集をひも解くと、おしどり塚の話が「鴛鴦之夢見事」と題してある。本文の一部を紹介しよう。「下野国に阿曾沼といふ所に、常に殺生を好み、ことに鷹つかふ俗ありけり。ある時、鷹狩して、帰りざまに鴛鴦の雄を一つ捕りて、

餌袋に入れて帰りぬ。その夜の夢に、装束尋常なる女房、姿形よろしきが、恨み深き気色にて、さめざめとうち泣きて、「いかにうたてく、わらはが夫をな殺させ給へる」と言ふ。「さることこそ候はね」といへば、「たしかに今日召しとりて候ふものを」と言ふ。なほかた

く論ずれば「日暮るればさそひしものをあそ沼のまこも隠れのひとり寝そうき」とうちながめて、ふつふつと立つを見れば、鴛鴦の雌なり。うちおどろきて、朝見れば、昨日の雄に背食ひ合はせて、雌の死せるありける。」とある。

沙石集では、おしどり塚の話の場所は、阿曾沼（現在の佐野市浅沼町との説がある）とある。宇都宮を知っていた無住法師が、阿曾沼と救食川とを間違えたとは思われない。そう考えると「鴛鴦塚之碑」の碑文の執筆者は、沙石集を読んだ上で書いたものではないとも

思われるのである。

ところで江戸時代嘉永三（一八五〇）年に出版された河野守弘著「下野国誌」には「鴛鴦塚」について、「昔この辺に獵師ありてある時鴛鴦の雄鳥を射止めたりけるに、首を射切りて軀のみ得たり。明るあした同じ所にてまた雌鳥を射止めけるに、その羽かいの下に昨日の雄鳥の首をかき抱きてあり、さしも情け知らぬますら男なれどもこれを見て發心し、この所に埋めてしるしの石塔を建立したりぞと。」とある。「鴛鴦塚之碑」の碑文と極めて類似する。

「鴛鴦塚之碑」の執筆者は、下野国誌をもとに碑文を書いたと思われる。執筆者が沙石集を読んでいたら、こうした碑文を書かなかつたであろう。残念ながら「おしどり塚」の話は、沙石集に書かれたものではない。「鴛鴦塚之碑」の執筆者は、宇都宮に対する郷土愛が高かつたばかりに沙石集と結びつけてしまったのであろう。



「鴛鴦塚之略記」碑  
左上部が戦災で欠落